

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720060

研究課題名(和文) ポストメディアの美学 感性論的メディア論の再構築に向けた基礎的研究

研究課題名(英文) Aesthetics of Postmedia: Theoretical Research toward Reconstruction of Aesthetical Media Theory

研究代表者

門林 岳史 (Kadobayashi, Takeshi)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：60396835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、マーシャル・マクルーハン以来展開されてきた感性論的なメディア論の系譜を批判的に検討するとともに、それらを基礎として、今日のメディア環境に応えられる新たな感性論的メディア論を構築するべく、「ポストメディア」概念を提起することである。そのために本研究では、先行研究の理論的な読解を進めるとともに、メディア研究の国際的な学会やメディアアートをめぐる国際的な芸術祭などに参加し、研究交流と資料収集を進めてきた。また、東日本大震災以降のメディアの状況をめぐる議論に参加することで、「ポストメディア」概念をより具体的な状況に対する説明能力を持つ概念へと練りあげることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project is to critically examine the genealogy of aesthetic theory of media since Marshall McLuhan, and to propose a new theorization with "postmedia" as its key concept, in order to respond to the media environment today. For this purpose, I have pursued theoretical reading of preceding media theory, while attending international conferences of media studies and international media art festivals to share my view and gather materials. Especially, my involvement in the argument about the media situations after the Tohoku earthquake helped me elaborating the idea of "postmedia" as a grounded theory for concrete situations.

研究分野：メディア論・表象文化論

キーワード：メディア論 感性論 ポストメディア マーシャル・マクルーハン メディア・アート 東日本大震災

## 1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、メディア・テクノロジーに向けられた想像力が近代以降のように歴史的に変遷してきたか、とりわけ、メディアが社会や文化、ひいては人間の精神性に及ぼす影響がどのように捉えられてきたかを、主に思想史や批評理論の観点から考察してきた。とりわけ博士論文に基づいた単著『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン?—感性論的メディア論』(NTT出版、2009) および一連の関連研究業績においては、カナダのメディア理論家マーシャル・マクルーハンを対象とし、メディアをめぐる彼の思想の歴史的意義を多角的なアプローチから解明する課題に取り組んだ。

マクルーハンのメディア論は、「身体の拡張としてのメディア」というよく知られた公式からも分かるように、その理論の核心に身体論的な図式がある。彼の理論は後年になって、主にカルチュラル・スタディーズの論者たちによって、技術そのものが有する社会的な次元を度外視している技術決定論として、構築主義の観点から批判されてきた。しかしながら、メディア・テクノロジーの問題を身体論・感性論という視座から考察する彼のより根源的な問題構成は、そうした批判を受けてなお重要性を失っていない。マクルーハンのメディア思想に内在する美学＝感性論的認識は、直接的なかたちではないとはいえ、80年代にはジャン・ボードリヤールやヴィレム・フルッサー、フリードリヒ・キットラーといったメディア思想家たちに批判的に受け継がれてきた。また、より近年になって、マーク・N・ハンセン、ブライアン・マスマーミなどのように、現象学やジル・ドゥルーズの哲学に依拠しながらメディアの問題を身体と感覚の問題として捉えなおす試みも現れはじめている。さらには、N・キャサリン・ヘイルズの研究に代表されるポストヒューマン論の諸言説も、情報技術の問題を身体化／脱身体化の軸で捉えなおすことで、テクノロジーと身体を理解するにあたっての新たな問題構成を提示している。

## 2. 研究の目的

以上のような背景のもと、本研究は、美学＝感性論的なメディア論のこれまでの展開を系譜づけるとともに、その先に新たな感性論的メディア論に向けた展望を開くことを目的とする。その際、本研究ではキーワードとして「ポストメディア」という新たな概念を掲げた。「ポストメディア」とは、フェリックス・ガタリが晩年に複合的なメディア・テクノロジーの状況を考察するにあたって提起した概念である。また、それとは独立して美術批評の文脈においてはロザリンド・クラウスが、モダニズムの絵画を論じる際に持ち出される「メディウム・スペシフィシティ」

の概念を批判的に受け継ぎつつ、「ポストメディアム」という概念を提出している。このように個別の文脈に依拠して用いられてきた「ポストメディア／ポストメディアム」の概念は、90年代後半以降急速に展開してきた情報技術の社会への浸透を思想的な課題として捉えなおすにあたって大きな可能性を備えていると考えられる。とはいえ、そうした可能性を理論的に明確化するにあたっては、これまでのメディアをめぐる言説の系譜のなかでこの概念の意義を位置づけることが必要であり、その作業はほとんどなされてこなかった。そこで本研究は、感性論的なメディア論の系譜を批判的に検討し、そのなかで様々になされてきた「メディア」概念の理解のうちに、「ポストメディア」概念が持ちうる意義を位置づけることで、新たな感性論的メディア論を構築することを企てようとするものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 理論的考察

「ポストメディア／ポストメディアム」概念をめぐるこれまでの先行研究を系譜的に読解するとともに、それをマクルーハン以降の美学＝感性論的なメディア論の展開のうちに位置づける。とりわけ、近年の現象学的・身体論的なメディア理論(マーク・N・ハンセン、ブライアン・マスマーミ、ローラ・U・マークスなど)を批判的に読解し、本研究における理論的作業の糧とする。また、それと同時に同じく近年盛んに議論されているサイボーグ文化論、ポストヒューマン論についても、そのメディア論的な射程について検討する。

### (2) 作品分析

(1)で述べたポストメディアの美学の理論的考察を実例に即して検証するために、一方ではSF映画を中心とする映像作品において表現されるメディア・テクノロジーの表象、他方ではビデオ・アートおよびメディア・アートの歴史的系譜と現在の制作状況について、資料収集と作品分析を進める。また、その他、現在の情報技術環境において展開されているメディア実践についてもあわせて調査を進める。

## 4. 研究成果

### (1) 理論的成果

第一に、本研究を開始した2011年は、マクルーハン生誕100周年にあたる年であり、それを記念する国際的な学会やシンポジウムが各地で開催された。報告者も本研究の助成を受けて、「McLuhan Galaxy Barcelona 2011」(於バルセロナ)および「Re-touching McLuhan」(於ベルリン)に参加し、マクルー

ハン研究の最新の動向について知見を得ることができた。とりわけ、マクルーハンにおける「触覚」概念が、近年のモバイル・メディア技術との関連で再評価されはじめており、そうした研究動向を共有することができたのは、感性論的なメディア論の再構築を目的とする本研究にとって有意義であった。

第二に、2013年に表象文化論学会大会を勤務校である関西大学で運営したおりに、シンポジウム「映像のポストメディア的条件」など、本研究課題と密接に関連するプログラムを組織した。また、本シンポジウムで議論したテーマを発展させた小特集「ポストメディア映像のゆくえ」を編集し、学会誌『表象』（第8号、2014年）にて発表した。

以上のように進めてきた研究について、その部分的な成果をせんだいメディアテーク（2013年）、コンコーディア大学（2013年）における講演で発表した。また、2014年度前半には、関西大学の助成を受けてベルリン工科大学にて在外研究に従事し、当地の研究者たちとともにワークショップ「Post-Media: Discourses and Interventions」を開催した。本ワークショップには、ロイファナ大学ポストメディア・ラボの研究者を迎え、本研究課題にとって有意義な議論を交わすことができた。

最後に、以上のような研究成果に付随して、アレクサンダー・ザルテン氏（ハーバード大学）、マーク・スタインバーグ氏（コンコーディア大学）との共同研究のかたちで、日本のメディア理論史についての研究を進めた。第一に、ミシガン大学で開催された国際学会「Permanent Seminar on Film and Media Studies」において、両氏とともに研究発表パネルを組織し、報告者は梅棹忠夫が1960年代に展開していたメディア理論についての研究発表を行った。第二に、両氏が企画を進めている日本のメディア理論についてのアンソロジーに、東浩紀が2000年前後に展開していたメディア理論についての論文を発表予定である。後者については、2013年にハーバード大学で開催されたワークショップに参加し、執筆予定者と各章の内容について討議した。

## （2）事例の調査・分析

本研究の第二の研究課題であるメディア技術と関連する作品や事例の調査については、メディア・アートの国際的な拠点であるメディア芸術センター（カールスルーエ）、メディア・アートの国際的な芸術祭アルス・エレクトロニカ（リンツ）、コンピュータ・グラフィックスやメディア技術についての北米最大規模の学会 SIGGRAPH などにおいて調査を進め、メディア・アートの最新の動向について知見を深めることができた。また、国内においても、毎年2月に開催されるビデオ・アートの芸術祭「恵比寿映像祭」を継続的に訪れているほか、日本におけるメディ

ア・アートの拠点である山口情報芸術センターとインターコミュニケーション・センター、その他様々な展覧会や芸術祭において調査を進めた。

また、SF映画を中心とする映像作品の分析を進め、その成果の一部として、日本のメディア文化についての国際学会「Mechademia Conference」（ソウル、2013年）において『攻殻機動隊』におけるポストヒューマンズムについての研究発表を行った。本研究発表の内容は、共著書『映画とテクノロジー』（ミネルヴァ書房、2015年）にて「ゴーストの縛りをほどく——『攻殻機動隊』、ポストヒューマンズム、パレルゴン」として公刊した。

最後に、本研究開始当初には計画していなかったことであるが、2011年の東日本大震災を受け、震災以後のメディアや映像の状況についての調査を進めた。本件については、震災以降、市民連携型の映像メディア・プロジェクト「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を展開しているせんだいメディアテークと継続的にコミュニケーションをとり続けているほか、2年ごとに開催される国際的な映画祭である山形ドキュメンタリー映画祭などにおいても、震災をめぐる映像表現について資料調査を続けている。本テーマに関しては、本研究課題の理論的な成果を同時代的なメディア状況と架橋する試みとして、今後も研究を発展させていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

- ①加治屋健司、北野圭介、堀潤之、前川修、門林岳史、ポストメディア理論と映像の現在、表象、査読無、第8号、2014、18-45
- ②門林岳史、メディアムのかなたへ——序にかえて、表象、査読無、第8号、2014、12-17
- ③門林岳史、三浦哲哉、ポストメディア時代の映像2——対話編、ミルフイユ、査読無、第6号、2014、51-72
- ④門林岳史、ポストメディア時代の映像、ミルフイユ、査読無、第6号、2014、30-50
- ⑤門林岳史、歪んだ仮面——『仮面ライダー』と『人造人間キカイダー』におけるポストヒューマン的存在論、ユリイカ、査読無、44巻10号、2012、86-91
- ⑥門林岳史、美はどこへ行ったのか——神経美学の批判的系譜学、美学芸術学論集、査読無、2012、52-61
- ⑦門林岳史、カタストロフに寄り添う映像——震災ドキュメンタリーをめぐって、10+1 web site、査読無、2012  
<http://10plus1.jp/monthly/2012/03/post->

- ⑧ 門林岳史、カタストロフの映像は今？、『第四回恵比寿映像祭 映像のフィジカル』カタログ、査読無、2012、38-45

[学会発表] (計12件)

- ① Takeshi Kadobayashi, The Post-Media Condition in the Wake of Japan's 3.11 Disaster, Post-Media: Discourses and Interventions, 招待講演, 2014年6月20日, Technische Universität Berlin (ドイツ)
- ② 門林岳史、齋藤達也、印刷メディアと身体、展覧会「指を置く」、招待講演、2014年2月10日、ギンザ・グラフィック・ギャラリー (東京都)
- ③ 門林岳史、三浦哲哉、ポストメディア時代の映像2——対話編、映画上映プログラム「対話の可能性」、招待講演、2013年12月14日、せんだいメディアテーク (宮城県)
- ④ Takeshi Kadobayashi, The Post-Media Condition in the Wake of Japan's 3.11 Disaster, ARTHEMIS, 招待講演, 2013年11月13日, Concordia University (カナダ)
- ⑤ 門林岳史、ポストメディア時代の映像、映画上映プログラム「対話の可能性」、招待講演、2013年8月10日、せんだいメディアテーク (宮城県)
- ⑥ 門林岳史、マクルーハンと触覚、「TECHTILE」集中ワークショップ、招待講演、2013年3月9日～10日、山口情報芸術センター (山口県)
- ⑦ Takeshi Kadobayashi, Ghost Unbound: Posthuman Ontology in the Ghost in the Shell Series, 3rd Mechademia Conference on Anime, Manga and Media Theory from Japan, 2012年11月29日～12月2日, Korean Film Archive, Dongguk University (韓国)
- ⑧ Takeshi Kadobayashi, Tadao Umesao's Theory of Information Industry and 1960s Japanese Media Theory, Permanent Seminar Conference: Histories of Film Theories in East Asia, 2012年9月27日～30日, University of Michigan (アメリカ)
- ⑨ 門林岳史、美はどこへ行ったのか——神経美学の批判的系譜学、ワークショップ「美は分析できるか?」、招待講演、2012年6月15日、一橋大学 (東京都)

- ⑩ 門林岳史、神経美学の批判的系譜学、第6回神戸大学芸術学研究会「脳／美学——脳科学のイメージ (論)」、招待講演、2011年11月19日、神戸大学 (兵庫県)

- ⑪ 門林岳史、怪獣を飼い慣らす——『ゴジラ』連作におけるシリーズ化と擬人法、UTCP レクチャー、招待講演、2011年9月16日、東京大学 (東京都)

- ⑫ 門林岳史、ポストメディウムの美学、第9回新潟哲学思想セミナー、招待講演、2011年6月24日、新潟大学 (新潟県)

[図書] (計3件)

- ① 塚田幸光編著、門林岳史分担執筆、ミネルヴァ書房、映画とテクノロジー、2015、291
- ② 五十嵐太郎編著、門林岳史分担執筆、LIXIL出版、3.11/After——記憶と再生のプロセス、2012、320
- ③ 北村紗衣編著、門林岳史分担執筆、電子書肆 さえ房、共感覚の地平——共感覚は共有できるか?、2012、92

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

門林 岳史 (Kadobayashi, Takeshi)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：60396835

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし